

## 《開幕》森美術館 「塩田千春展:魂がふるえる」同時開催プログラムのご案内

会期：2019年6月20日(木)ー10月27日(日) 会場：森美術館(六本木ヒルズ 森タワー53階)



MAMコレクションは、森美術館の収蔵品を、多様なテーマに沿って順次紹介する展覧会シリーズです。

### MAMコレクション010:フェイクニュース?

主催：森美術館

企画：近藤健一(森美術館キュレーター)

出展作家：会田 誠、ユエン・グァンミン(袁廣鳴)、ジョウ・ティエハイ(周鉄海)

米国大統領ドナルド・トランプの口癖にもなっている「フェイクニュース」。インターネット上に流れるデマをはじめ、今日、何が事実なのかますます見えにくくなっています。本展では、3人の作家の作品を通じて、マスメディアにおける情報生産の本質について考察します。

ジョウ・ティエハイ(周鉄海)の「フェイクカバー」シリーズ(1995-1997年)では、『ニューズウィーク』など国際的に影響力のある雑誌の表紙に自身の顔写真や作品を登場させ、マスメディアが有名人を作り上げる力に着目します。会田誠の映像作品《The video of a man calling himself Japan's Prime Minister making a speech at an international assembly》(2014年)では、作家本人が総理大臣に扮し、鎖国の重要さなど独自の外交論を日本語訛りの英語で演説します。この演説が「フェイク」であることは明白ですが、グローバル化が進む現代社会に対する風刺でもあります。ユエン・グァンミン(袁廣鳴)の《占領第561時間目》(2014年)は、台湾の学生や市民が立法院(国会)を占拠した2014年のひまわり学生運動の一場面を記録した映像作品です。貴重な記録という側面を持ちつつも、カメラワークによる迫力あるシーンは私たちに惹きつけ、スペクタクルとしての映像が作られる仕組みをも示唆します。



会田 誠  
《The video of a man calling himself Japan's Prime Minister making a speech at an international assembly》  
2014年  
ビデオ  
26分7秒



ユエン・グァンミン(袁廣鳴)  
《占領第561時間目》  
2014年  
ビデオ  
6分

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 津原、田ヶ谷、伊藤  
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp  
〒104-8158 東京都中央区銀座7-2-22 同和ビル

MAM  
SCREEN

MAMスクリーンは、世界の多様な映像作品のなかから選りすぐりの  
シングル・チャンネル作品を上映するプログラムです。

## MAMスクリーン011: 高田冬彦

主催：森美術館

企画：椿 玲子（森美術館キュレーター）

高田冬彦は、宗教、神話、おとぎ話、ジェンダー、トラウマ、性、BL（ボーイズラブ）などさまざまなテーマを扱いながら、ポップでユーモアのある、時折エロティックな映像作品を発表してきました。人間社会の普遍的なテーマを独自に分析、批評し、誇張した高田の作品群は、荒唐無稽に見えながら、緻密に構成されています。それゆえ、ユーモラスでありながら、さまざまな問題提起をはらんだある種のカリカチュアとなっています。特に、現代社会において再考が求められている男らしさや女らしさの定義に対する批評性は顕著だといえるでしょう。

本プログラムでは、2007年から2019年までの11作品を一挙に紹介することで、高田の映像作品の多彩な魅力に迫ります。

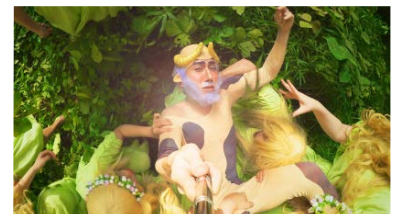
### 上映作品

※ 当プログラムは約1時間で、毎時00分から上映を開始いたします。  
※ ラーニング・プログラム等実施のため、「MAMスクリーン」の上映のない時間帯があります。  
詳細は、森美術館ウェブサイトをご覧ください。 [www.mori.art.museum](http://www.mori.art.museum)

1 《Dream Catcher》	2018/2019年	5分 25秒
2 《牧神の午後》	2015-2016年	5分 27秒
3 《Love Phantom》	2017年	1分
4 《無垢の歌   健康な愛》	2019年	5分 36秒
5 《偉い石プロジェクト》	2007年-	8分 9秒
6 《JAPAN ERECTION》	2010年	2分 7秒
7 《WE ARE THE WOMEN》	2013/2019年	8分 47秒
8 《MANY CLASSIC MOMENTS》	2011年	3分 17秒
9 《富士山のある部屋》	2012/2019年	2分 7秒
10 《LOVE EXERCISE》	2013/2019年	9分 8秒
11 《新しい性器のためのエクササイズ: #1 ホタル、#2 のびのびカルバン、 #3 しぼんでいくボール》	2019年	5分 20秒



《WE ARE THE WOMEN》  
2013/2019年  
ビデオ  
8分47秒



《牧神の午後》  
2015-2016年  
ビデオ  
5分27秒

### 高田冬彦

1987年広島生まれ、千葉在住。Art Center Ongoing（東京、2012、2014、2017年）、児玉画廊（京都、2013年/東京、2016年）で個展を開催。「メント・モリ ～愛と死を見つめて～」白金アートコンプレックス（東京、2013年）、「MOTアニュアル2016 キセイノセイキ」東京都現代美術館、「Bodyscapes: new film and video from Japan」ロイヤル・カレッジ・オブ・アート他（ロンドン他、2018-2019年）などに参加。



アーティストトーク「Fuyuhiko Love Me」を、2019年7月12日（金）19:00-20:30に開催いたします。  
詳細は、ウェブサイトをご参照ください。 [www.mori.art.museum](http://www.mori.art.museum)

### プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：津原、田ヶ谷、伊藤  
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: [mam-pr@kyodo-pr.co.jp](mailto:mam-pr@kyodo-pr.co.jp)  
〒104-8158 東京都中央区銀座7-2-22 同和ビル

MAM  
RESEARCH

MAMリサーチは、アジアの現代美術を中心に特定の作家や動向に着目し、歴史的、社会的な文脈とともに考える資料展示です。

## MAMリサーチ007:走泥社—現代陶芸のはじまりに

**主催:** 森美術館

**企画:** 徳山拓一(森美術館アソシエイト・キュレーター)  
中村裕太(アーティスト、京都精華大学芸術学部特任講師)

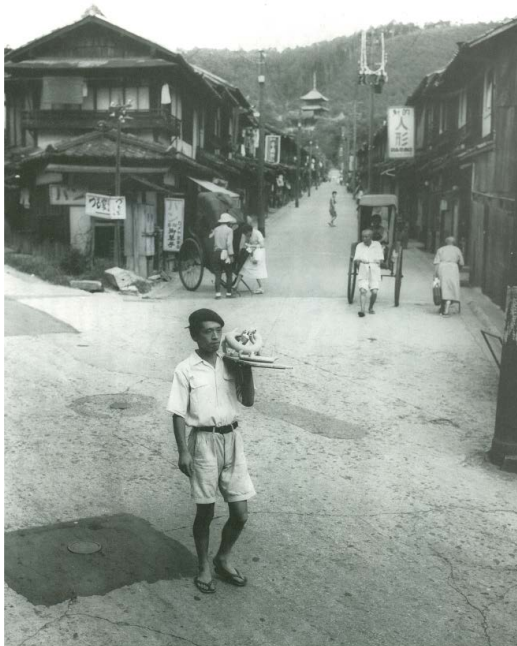
**企画協力:** 諸山正則(前東京国立近代美術館主任研究員)  
森野彰人(京都市立芸術大学教授)

走泥社は1948年に京都で結成された陶芸家のグループで、1998年に解散するまで50年の長きにわたり活動しました。その存続年数はもとより、戦後の陶芸界を代表する作家たちが多数所属していたことから、日本の陶芸史において特別な存在であったといえます。

発足時のメンバーには、八木一夫を中心として、鈴木治、山田光、松井美介、叶哲夫がおり、全員が京焼の伝統的な窯業地である五条坂周辺で活動していた若手作家でした。走泥社の成り立ちの背景には京焼の歴史があり、さらには、具体美術協会やパンリアル美術協会、墨人会や池坊など、終戦直後に京阪神でみられた前衛的な表現活動との関係があったといえます。

本展では、走泥社の資料や作品写真を通して、結成当時の活動の背景と要因を検証します\*。さらに、実験的な試みとして、本展の共同企画者であるアーティストの中村裕太が、1950年代から1960年代までの現代陶芸に見られる「造形の変遷」を読み解き、新作のインスタレーション作品として発表します。それらを通じて、伝統と革新の狭間で新しい表現を追い求めた陶芸作家たちの活動を振り返り、現代陶芸としての意義を読み解きます。

\* 走泥社の作品展示はありません。



《ザムザ氏の散歩》を肩にのせる八木一夫  
京都、五条坂にて、1954年  
画像提供: 八木 明



展示風景:「第5回走泥社展」京都市美術館 1951年  
© Yagi Akira

**プレスリリース** お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 津原、田ヶ谷、伊藤  
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp  
〒104-8158 東京都中央区銀座7-2-22 同和ビル